

HIGASHIOSAKA CENTRAL ROTARY CLUB

(第2660地区)

WEEKLY BULLETIN

No. 6

東大阪中央ロータリークラブ

創立 昭和47年2月20日
例会日 毎週月曜日 12:30~
例会場所 シェラトン都ホテル大阪
事務所 大阪市天王寺区筆ヶ崎町5-38
〒543-0027 ロイヤルパークス桃坂1112号
TEL. 06(6772)2320
FAX. 06(6772)2327
E-mail:hcrc@at.wakwak.com



会長 百 濟 洋 一
会長ノミニ 切 石 博 之
副会長 瀧 田 浩 彦
幹事 三 木 武 志
会報委員長 福 岡 康 民

THE FUTURE OF ROTARY IS IN YOUR HANDS

ロータリーの未来はあなたの手の中に

2009~2010年度 国際ロータリー会長 ジョン・ケニー

第 1736 回例会 平成 21 年 8 月 24 日 (月曜日) 第 6 号

本日の例会

8月24日(月) 第3例会

- ◎ソング 「奉仕の理想」
◎卓話 「陶芸から学ぶもの」
ゲストスピーカー 久宝 薫元 太田 俊一様
(担当: 西村典三会員)
◎本日の献立 フランス料理

次回の例会

8月31日(月) 第4例会

- ◎卓話 「日頃の心」
ゲストスピーカー 光徳寺住職 高橋 法信様
(担当: 西村啓三会員)
◎本日の献立 松花堂弁当

前回の例会記録

8月17日(月) 第2例会

- ◎ビジター 大和高田RC 世古千代子様

会長挨拶

会長 百濟洋一

8月8日(土) 東京丸の内で開催されました吉岡先生の本『死に行く子供を救え』出版記念の会に湯谷さんと参加して来ました。会場には約100名前後が参加されており、午後6時より吉岡先生のミャンマーでの医療活動について・NPO「ジャパンハート」の発足から現状の活動についてなど約50分講演会があり、その後立食パーティーがありました。

吉岡先生のトップメッセージは、私たちの活動は、

「医療の届かない所に医療を届ける」というコンセプトで賞かれています。海外の途上国であれ、国内の僻地や離島であれ、それがたとえ人の《こころ》の中の問題であれ、できうる限り積極的に関わっていきたい。

◆ロータリー8月は会員増強及び拡大月間です。

8月10日(月) 東大阪西ロータリークラブへ三木幹事とビジター訪問をして来ました。例会場所は、大阪国際交流センターで午後6時30分からです。会員卓話で西クラブの現状について、「西クラブは今危ない、会員数以前60名が現在40名です。自由経済では少なくなったらやめるしかない。会長自身が5名~6名の新入会員を入会する意気込みを持つ。クラブの合併も視野に入れ、どのように活性化するか、どうすれば活性化出来るのか、動く事が大事である」とお話をされました。当クラブも同様ではないでしょうか。会員増強については、会員皆様が危機意識を持たれ、活動して頂きたいと思います。私も会員増強に頑張ります。

幹事報告

幹事 三木武志

1. 今年度の概況報告書をポストに入れてあります。
2. 他クラブ例会変更・休会の案内を掲示しています。

出席報告

佐井委員

本日の会員数	42名
本日の出席者数	24名
本日の出席規定適用免除会員	16名
本日の出席率	70.59%
8月3日の修正出席率	86.84%

鈴木会員 例会欠席のお詫びです。

卓話

「私の仕事」

藤原英夫

今週は会員増強並びに拡大月間でありますので、各会員の廻りに素晴らしい人がいないか、もう一度見直しチェックしてみてください。そして積極的にアプローチしてください。私の方も腰軽く動きますのでよろしくお願ひいたします。

今日の卓話は“私の仕事”というテーマにさせて頂きましたが、考えてみれば、私も66歳という事で、65歳で現役引退と思っていた事が現実に行われてきていませんが、ぼつぼつ潮時に来ていますので、いまさらどうかと思うのですが、だんだんと難しくなるビジネスの中、いろいろな危惧を考えつつ思うところを述べさせて頂きたいと思っています。

仕事の内容は、合成樹脂、合成ゴム、そしてその関連化学薬品などの原料の卸売業という事であります。商売の基は、石油化学つまり原油であります。何年か周期で起こる価格変動と消費変革に凌ぎを削っている業種であります。ご存知の通り石油が精製されナフサ（粗製ガソリン）、灯油、軽油、重油、アスファルトなどがとれますが、その中で軽質ナフサから分解されるエチレン、プロピレン、ベンゼン、C4などがプラスチックやゴムの原料に成っているわけであります。私共はその原料を製造メーカーから買い加工メーカーに販売し、また製品となったものを販売するわけであります。日本では石油は皆無と言っていいほど産出しなないので原油の形かナフサで輸入しなければなりません。その為常に海外の石油事情に影響されてきました。これまでの日本の石油化学工業は、構造的にも体質的にもコスト面での弱点を曝け出してきました。

その歴史は、70年代の二度の石油ショック（S48、63）は、原料コストが上昇したため、国際競争力が落ちたため日本企業の生産活動が圧迫され不況カルテルなどが結成されました。それでコンビナートの改良や製造の再編成が行われたのですが、80年代に入りバブル経済と景気拡大が起り改革はそっちのけになり、国際的なコスト競争力を付けるための抜本的な改革が遅れてしまうこととなります。

そして、90年代になると隣の韓国で財閥系の石油化学コンビナートが相次いで完成し、それがコスト並びに市況を揺るがし、また2000年にはサウジアラビアと台湾で大型石油コンビナートの新増設が行われ、改めて日本の輸出競争力が問題となりました。ここでもまたコンビナートの整備、プラントの破棄や樹脂メーカーの共販の設立など対策は講じられましたが、04年頃から中国の高い経済成長による輸入の急増により景況が良くなったため、この問題は沈静化してしまいました。

09年以降今度は中東で再びコンビナートの新設ラッ

シュが始まりました。そしてまた、輸出競争力は落ち、化学業界の今後に大きな影を落としています。概ね石油化学産業の流れはこの様な事で、将来に不安を残す状況であります。

同じ様な経済環境のなかでも欧米の石油メジャーが古い体質から脱出し、石油精製から石油化学工業までの高度な一体運営を行い質の高い競争力を生み出しうまく乗り切ってきたのに対し、日本はこうした連携が薄かった為、益々厳しい状況になったと考えられます。

これからの石油化学工業の中、簡単でコストの安い商品はもはや中国、インドに太刀打ちできませんし、高収益企業が減り、不採算の商品が増えるという姿が見えます。勿論、知恵を出し、研究開発に成功し十分な収益を上げている企業も、日本には沢山ありますが、これからどう進むのか、石油化学工業が抱える問題は色々あります。

1) 将来の原油の数量を考えると、

埋蔵量の点では、その抱える内訳は、中東(約1兆3,300億バレル)が60%、旧ソ連が10%、アフリカ9%、中南米9%、北米6%、アジア3%で、またその76%がOPEC諸国にあります。そしてピークオイル、つまり生産可能年数は2008年の計算では、あと約41年といわれています。確定した話ではありませんが、UAEなど観光産業に傾いているところもあるくらいです。現在、世界のエネルギー需給が逼迫してきています。需要面では、中国、インドの増加が著しく、近い将来米国に次ぐ消費国になることは間違いありません。

2) それに原油国における資源ナショナリズムが台頭してきています。つまり原産国が国内の石油、天然ガス資源の国家管理を強化し、自国の主導権の下で開発、生産を行う動きであり、自国の資源を採掘する外資企業に対する増税などが挙げられます。それからイランの核開発における中東情勢の不安、ナフサの精製能力不足などがその理由。

3) 環境面で温暖化防止削減のため、京都議定書などに基づく指針が決められ、国、産業が目標に向かって対策を講じる必要性が出ています。

このようなことから、日本政府は、2006年にエネルギー戦略を策定し2030年までに海外自己開発比率を拡大し、現在の約17%を40%にすることでエネルギー安定確保を軸にしている。現在の日本の備蓄量は国家備蓄で101日分、民間備蓄で81日分で合計182日分となっていますが、私共の小さな商売でも情報を多方面から取り入れ、次世代のエネルギーがどのように変わっていくのか勉強し、身軽に転身できる体制が必要と思われる。その中でもプラスチック製品がモルジブなどインド洋の真ん中の美しい浜辺でゴミとなって浮いているのを見ると、もっと企業には、また人にはなすべき事があると感じます。